

第 15 回一関市総合教育会議 会議録

- 1 会議名 第 15 回一関市総合教育会議
- 2 開催日時 令和 4 年 7 月 7 日（木） 午後 1 時 30 分から午後 3 時 15 分まで
- 3 開催場所 山目小学校 きらきらホール
- 4 出席者
 - (1) 構成員
佐藤善仁市長、小菅正晴教育長、千葉和夫教育委員、佐藤一伯教育委員、伊藤一志教育委員、桂島加奈子教育委員
 - (2) 事務局等
市長公室長、市長公室次長兼政策企画課長、政策企画課課長補佐兼政策推進係長、政策企画課政策推進係主任主事、まちづくり推進部いきがづくり課長、教育部長、一関図書館長、教育部次長兼学校教育課長、教育総務課長、文化財課長兼骨寺荘園室長、一関市博物館次長、教育総務課庶務係長、
- 5 議題
 - (1) 教育における I C T の活用について
 - (2) 子どものスマホ・ゲーム等への対応について
- 6 公開、非公開の別 公開
- 7 傍聴者の数 報道 2 社
- 8 挨拶

市長挨拶

一関市総合教育会議の開催は今回で 15 回目となる。昨年の 11 月に開催された第 14 回目の会議は、市長就任後初めての会議であったので、就任にあたって一番に訴えてきた、一関市の最大の課題と認識している人口減少問題について話した。人口減少に立ち向かっていくための処方箋はいくつかあるが、私の中での「まち・ひと・しごと」それぞれの意味付けについて話をさせていただいた。その上で、市政と教育の接点、さらに詳しく言えば学校との接点というところで、私が申し上げた観点からこれからの一関市の教育について、幅広く総論的な話をした。

前回は総論の話であったが、ここから先は各論の展開になっていく。各論の中で何を一番先に取り上げるかとなった時に、現場では様々な課題があると思うが、私共が際立てて行っていくことの 1 つとして D X の取組みが挙げられる。教育現場においても、タブレットの配布や、それを使っての学習を行っており、I C T が教育現場でどのように活用されるのか、また光があれば影もあるわけで、課題は何かというところを、具体的な各論の第 1 回目とした。

山目小学校は I C T を活用した教育では市内でも際立っている学校なので、実際に授業を見させていただきながら懇談をしたいと考えている。

9 懇談

教育長 これからは教育における I C T 活用を話題にするが、まずは授業を見ての感想を聞

きたい。

千葉委員 先生が児童に対して質問をした時に、ボタンを押して回答するだけで前にグラフが出てきて全体の傾向がすぐに分かる。これまでの紙で集計をして取りまとめる方法よりもはるかに効率的で、今後大いに可能性が広がるのではと感じた。

また、調べ学習を家でやってくるように言っても、やってこない児童もいると思う。それを、授業中にインターネットで答えを探し、その結果をタブレットに書き込むことによって全体に共有され、先生もそのすべてを知ることができるので、さらに有効な活用方法を探っていけば相当効果のあるものになると感じた。

疑問がいくつかあるが、まず、調べ学習の際は、普通のインターネットで調べることができるのか、それとも資料に記載されている「ブリタニカ百科事典」に限定をして調べるのか後で教えてほしい。2点目は、児童がタブレットに答えを書いて大きな画面に全体が映るが、ひとつひとつ読もうとしても私の視力では読めなかった。児童のタブレットでは、ひとつひとつをすべて拡大できるのか。3点目はタブレットに記入したものは保存されていて、次の授業で振り返る時に活用することができるのか、教えてほしい。

教育長 回答は後で教えていただきたいと思うが、基本的には3つとも可能である。

佐藤委員 事前の説明の中で、児童の学習意欲の向上がみられるとのことであったが、実際に授業を拝見して、本当に意欲的であり、集中というよりも夢中という様子で大変熱心に取り組んでいる様子が見られた。

端末の大きさは11.6インチ画面だったと思うが、思ったよりも見やすく、タブレット型ということでキーボードだけではなくタッチで操作ができ、2年生の児童の中にはキーボードを折りたたんだ状態にすることで、机の上に置いてもノートを取ることができており、大きさも適切であると思った。

3年生の児童の中で、ログインができずに困っている子がいた。本日は公開授業ということで対応ができなかったかもしれないが、普段はそういったことへのケアもしていることと思う。

端末の使い方は、私たちよりも児童の皆さんのほうが習得できている様子であり、すべての科目において有意義に活用されている印象であった。

桂島委員 ゲームの影響で視力が下がっている子どもが多いようなので、近いところにモニターがあると見やすいと思う。先生方は授業の席順を決める時に、視力が弱い子どもを前の席にするなどの工夫をしているようなので、こういった形の授業の時は近いところにモニターがあれば席順を考えなくてもよいと思った。

2年生の授業でペンを使ってタブレットに書くシーンがあったが、どう書いていいのか分からないのか、やり方が分からないのか、1人だけ手が止まっている子どもがいた。こういった時に、ほかの子どもたちが提出している様子がモニターに映るので、提出していない子がいた場合に先生がそのことに気が付くことができ、何か困ってい

ることがあるのではという判断がしやすいと思った。ノートに書くような授業であれば、何も書かずに、本当は分からないのに先生に聞けないまま家に帰ってしまうこともあると思うので、モニターがあることでしっかりと対応することができると思う。

掃除の仕方を調べる場面で、インターネット上に広告が出ており、授業の内容ではなくその広告のほうに気になってしまうのではないかと思ったが、誘惑に負けず、授業の内容を調べていた。インターネットだと関係のない情報が入ってくるがあるので、そういったときに授業のほうに集中できればよいなと思って見ていた。

総合的には大変効率がよく、膨大な量のデータをすぐに検索することができるので、大変参考になった。

伊藤委員 子どもたちの反応がよく、自分の考えをきちんと表していたように思う。また、タブレットを使いこなしていることに驚いた。2年生の児童たちも画面に映ったものを指先で操作し、先生の質問にきちんと答えており大変驚いた。

1つ心配な点は、タブレットの取扱い方、管理の方法、メンテナンスの方法がどのようになっているのかが気になった。

授業のシステムを見させていただいて感じたのは、一関市内の学校の中で山目小学校は最先端にいると思うが、例えば大東地区のある学校からはなかなかタブレットを使いこなせていないという話もあり、学校格差があるのではという点も気になった。

また、修学旅行にタブレットを持って行って活用したという学校もあり、そういった活用方法もあるのかと思い、大変便利であると感じた。

市長 会議が始まる前にここが私の母校であると話した。極めて当たり前の話であるが、その当時とは状況がまったく違っており、教室には大型のモニターがあり、机の上にはタブレットがありモノで溢れている。教育現場でICTを活用していくことがどうということかと考えたときに、モノを使いこなせる人間を育てることだと感じた。モノを使いこなせる人間を育てていくことと、並走して探っていくことの1つに、モノを使いこなせる人間を育てていくことで、その人間の何を成長させるかということがある。資料No.1の右側に適切で効果的なICT活用のための視点が4点書かれているが、市としてDXを推進していく意味合いと、教育の観点からの視点と、被っているところがあつたので、これについてはこのあと時間があつたら話したいと思う。

モノを使いこなせる人間を育てることによって、何を動かしていくのかというところは並走して探っていかなければならないと感じた。

教育長 市長からモノを使いこなすことで、どういう人材を育てようとしているかという問題提起がされたが、この辺りをどのように考えるか。ICTによって子どもたちはどう大人になっていくのかというイメージがあればお話いただきたい。

千葉委員 資料No.1の適切で効果的なICT活用のための視点の中の4番目にある、問題解決的な学習過程における活用というのが、おそらく今の子ども達に付けさせたい力の最たるものであると思う。様々な問題にぶつかった時にそれをどう解決していくのか、

企業であっても役所であっても、その対応力によって解決まで導く、そのためのツールとしてのICTの活用であり、究極的には問題を解決する力が生きる力なのではないかと思っている。

市長 市がなぜDXを推進するのかについて話したい。1つ目は市民側、ユーザー側の話である。申請の手続きの際に、押印の省略ができてペーパーレスになって役所の窓口に行かなくて済むというような、利便性の向上という点が挙げられる。2つ目は、サービスを提供する市役所側の視点であり、人的な資源、時間、エネルギーを省略化できる。そのことにより余剰が生まれ、余剰を様々な分野に持っていくことができる。これがDXを成長戦略に入れる1つの理由であり、国も同じ発想である。もう1つは、役所の職員の仕事の仕方を変えるわけだが、やり方を変えるだけではなく、仕事そのものを変えることが本来のDX化の意味合いであると思っている。

少し話はそれるが、一関高専の校長先生と話した時に、高専の学生は顕著な活動をしているが、彼らは普通に回っているスマホやパソコンを使って、新しいものを作っているようだった。これは先ほど千葉委員さんがおっしゃった課題解決力だと思う。資料No.1の右上にある、適切で効果的なICT活用のための視点の1番目のアプリケーションソフトの特性を活かした活用とあるが、一関高専の学生はアプリを使いこなしており、今の児童たちもすぐにそのようになると思う。2番目の深い学びにつながる活用について、ここはどうなのかなと思っている。昔は人と話をしたりだとか、様々なことを経験したりだとか、デジタルではない分野で世の中のことを学んできた。それらを今はどうやって身に付けるのかが疑問である。3番目の資質・能力を育てる活用については、先ほどDX化により住民側の利便性が向上すると話したが、必ず向上するのかという話になる。国が「誰一人取り残さない」と言っているが、取り残された人がいるかもしれない。スマホで二次元バーコードを使って申請できるが、それができない方もいる。子どもの頃からこういったことに慣れておくことによって、この3番の資質・能力を育てるという点はクリアできると思う。次に4番目の問題解決的な学習過程における活用であるが、これがまさにDX化の目的とするところである。感覚的に1番のポイントにすぐにアプローチできるというのがICTの特性ではないかと思っている。

1番から4番の中で、2番の深い学びにつながる活用というのをどのようにやっていくのかが、今は分からない点である。

教育長 子どもたちは情報をお互いに交流することができるので、以前と比べると情報の量が爆発的に多くなっている。当然インターネットに接続しており、以前は図書館に行き調べるか、人から聞くとか限定的であったものが、一気に情報が増えている。今の時代はその情報をいかに収集して、いらない情報という情報を選択して、それを自分のものに落とし込んでいくという過程の中で新しい創造に繋がっていくというメリットがあるし、それをやるしかない時代になっている。今の子どもたちはそれをやらないと、世の中を渡っていけない状況になってきていると思う。そういう点では、子どもの時からICTに慣れ親しんで、情報を収集し選択するという、生きていく力

にはなると思う。ただし、授業を見ていて、私たちが子どもの時に出来ていたことが出来なくなっているのも確かだと思った。例えば、ノートを取る時間は絶対に少なくなる。ノートを取る時間が少ないということは書く時間が少なくなり、書く能力は退化していくと思う。しかし、これからの時代はそういった力が退化してでも、ICTの情報処理能力がないとやっていけない時代になると思う。そういう意味では、小学校の頃からICTを活用した授業に参加して、交流し収集し選択して創造していく力が必要になると思っている。

桂島委員 重点項目として、ハード・ソフト両面の実効的なICT整備により学習活動の一層の充実を図り、資質・能力の育成を目指すと挙げられており、ICTギガスクール構想を導入する時には様々な問題があったと思う。これまでと授業のやり方が違うということで、難しいのではないかという意見もあったと思う。資質・能力の育成を図るために、やれないのではなく、とにかくやるという方向で、あとは一丸となって課題を解決していくしかないと感じている。

先ほど教育長さんがおっしゃったように、膨大な量のデータをいかに取捨選択して自分のものとして取り込めるか、活かせるかという点で、出来る子は出来ると思うが、やはり苦手な子どももいると思うので、周りがサポートしていかなければならないと感じている。得意な子はどんどん学べるが、苦手な子にとってはやはり問題があると思うので、相談できる相手がいるとサポートがうまくできるのではないかと思う。

また、手を挙げるのが苦手な消極的な子どもにとっては、その場で提出することができて、手を挙げる必要がないのでやりやすいと思う。提出が遅れるということもないので授業がやりやすいのではないか。

ICTを活用していくという流れになってきているのでその方向でいくしかないと思っているが、私たち人間はデジタルではなくアナログでできているので、アナログとデジタルの両立というのは考えていかなければならない。先日のKDDIの通信障害や節電してくださいという話がある状況で、ネット環境に障害があった時などにどうやって学習するかという問題は出てくると思う。こういった時にアナログでもしっかり学習できるようにしておかなければならない。ノートを取る時間が減っているという話もあったが、デジタルだけではできないこともあると感じている。

伊藤委員 桂島委員がお話されたようなことは本当に大事だと思う。不易と流行という言葉があり、今の時代に即した新しいシステムは大事だと思うが、ないがしろにされてよいのかと思うこともある。例えば先ほど教育長さんがおっしゃったように、ノートの取り方だとか言葉を大切にすることが機械化によって少しずつ失われているような気がする。機械に頼る人間になってしまうということも、やや気になる。この後にスマホ・ゲームへの対応が問題提起されるが、学校でICTを活用した学習をして、家に帰れば、人と会話をしたり外で遊んだりということをあまりせずに、機械に頼ってしまうような時間の使い方をする子ども達が多い気がする。先ほど申し上げたように、不易と流行という部分で、両立とまではいかないまでも、大事にしなければならないものは大事にしていかなければならないと感じた。

教育長 時代の流れの中でのメリットについて話があったが、気を付けなければならないことや課題についての議論になってきたので、子どものスマホ・ゲーム等への対応についても含めて、問題点を情報提供していただきたい。

I C T関係の負の部分も踏まえて、私たちはどういうことを考えていけばよいのかお話いただければと思う。

佐藤委員 家庭でのルールづくりについては、家庭で話し合う場を設け、地域と共に対策を考えていくというのは良い方向だと思う。人間のアナログ的な部分をどうするかという話があったが、心身の健康というのは正にアナログ的な部分にあたると思うので、そこをデジタルの技術で自分の身体や心を壊さないようにやっていくという意味で、一関市としてのルールづくりというところは是非取り組むべきだと思っている。

先般、赤荻小学校を訪問して、I C Tの取組みについて質問をしたところ、今後取り組みたいこととして、全校朝会を行いたいという話があった。今日見た授業は個人の端末でいかに情報を得て学ぶかということかと思うが、I C Tのプラス面で私が恩恵を受けたのはウェブ会議で実際に行かなくても参加できる環境となったことである。第14回総合教育会議において、市長さんからの仕事づくりの話の中で、100億円の年収の会社を1社ではなく、1億円の年収の会社を100社作るという話や起業の話があり、今後の一関市のキャリア教育の参考になると思った。今はコロナの影響で職場体験等がやりにくくなってきていると思うが、会社の社長さんとウェブで繋いで、仕事の仕方だけではなく人生経験について話を伺うことによって、深い学びに繋がると思った。一人一人が情報を得るという方法に加えて、みんなで交流できるような使い方も考えてみてはと思った。

伊藤委員 仙台の小児医療センターの田澤雄作先生の講演を何回かお聴きしたが、メディア障害というものがあるそうだ。スマホやタブレットを利用したゲームに没頭してしまうと、脳に悪影響を及ぼし、笑ったり泣いたり悲しんだりという感情が薄れてしまうとのことだった。特に深刻なのが、笑うことができなくなることで、話をしなくなり、深刻化すれば引きこもりになってしまい、自立できない人間になってしまう。ゲームをやる小脳にだけ刺激が与えられ、大脳にはあまり刺激がいかないということで、自分で考えることができなくなってしまうという話であった。時間を決めてルールの中でスマホやI C Tの活用をしていけば大丈夫だと思うが、偏った使い方をすると健康を害してしまうので大変危険だと感じた。

桂島委員 規則は与えるよりも自分たちで考えて作ったほうが守るということを実感している。自分で言った言葉なので守らざるを得なくなり、与えたルールよりも守るのだと思う。子どもと親でルールを作って、自分でルールを守っていくことは続けていきたいと思っている。

千葉委員 教育現場において、I C Tの活用というのはこれから大きなウェイトを占めてくる

と思う。また、スマホを所持している生徒が、中学校3年生で67%という状況もある。スマホもICTも離すことが出来ない状況になりつつある中で、テレビで報道されているような、SNSで知り合った人と密かに会って監禁されてしまったとか、出会い系で知り合った人と会って、結果的に山の中に埋められてしまうという悲惨な事件も実際に起こっているのが心配な点である。その危険な部分を、交通安全教室と同じようにスマホ安全教室のようなものを、やっちはいると思うが、それを徹底するような、守ってあげるような仕掛けも、教育委員会で担っていく必要があると思う。

教育長 こういった話をする機会にはいつも、アンデシュ・ハンセンというスウェーデンの精神科医が書いた、世界的にベストセラーとなった「スマホ脳」という作品を持ってくる。スマホの過度な使い方がいかに精神に影響を及ぼすかということをおもしろく事実に基づいて書いている。今の時代、ICT関係や情報機器は避けて通ることができず、それで育つ部分はあると思うが、一定程度の制限なしに無制限ということになってくると、マイナス面が非常に大きくなってくると感じている。

新聞等にも掲載されているので知っているかと思うが、市のICT指導員が中心となって、スーパーITキッズ事業というものを行っている。小学校5年生から中学校2年生くらいまでが対象で、手上げ方式で、ICTやIT関係の特にもプログラミングを学びたい子どもが30人程集まって、年間7回程講座を受けている。これは指定してやっているわけではなく、手上げ方式でやっているのだから、やる気のある子ども達が集まっている。この子ども達が将来一関に残れば、ここにいながら世界と繋がって、ここにいながら様々な創造ができるのではないかとわくわくしている。ICTは場所を選ばないので、一関にいながら一関のためにも、世界のためにも動くことができる。こういった取組みが拡大し、やる気のある子ども達がやる気のある分野についてどんどん学ぶ機会ができれば、人口減少対策に直接的ではないにしてもプラスに繋がっていく感じがする。今日のような授業で学びのきっかけを作って、自分から学んでいくという姿勢を身に付けることが、高校や高専、大学に繋がり、最後は一関に繋がれば大きな武器になるのではないかと考えている。

市長 先ほど今の学校や教室はモノで溢れているという話をした。モノで溢れているのは学校だけではなく、家庭も同じだと思う。ICTやDXはモノではなく何を含んでいるかということ、情報である。モノと情報で溢れているのは良いことだが、これをどうコントロールするかが重要である。学校ではモノの使い方、情報の整理の仕方を学ぶが、家庭ではそういったコントロールが効かないので、スマホ・ゲームの問題が起きている。

ICTを活用した授業というのは始まったばかりなので、これから先は定点観察をして様々なことを軌道修正していければよい。何を定点観測して軌道修正していくかということ、感覚と思考という視点である。ICTやデジタルは、感覚で使うことができ、情報を瞬時に操ることができ、また自分が何かをしようと思った時に瞬時に世界に発信することもできる。一方でモノや情報がない中で人間の心理を探っていく、例えば宗教や哲学の分野もある。感覚と思考という両極にあるものをどうコントロールしてい

くかということ、学校現場のみならず家庭や社会全体で考えていくことが必要である。定点観測するにあたっては、学校や家庭でモノや情報を子ども達がどう使いこなしているかという視点が必要であり、感覚と思考の両方を自在に行き来できて、成長していくような人間に育てていくことが必要だと感じた。

1人1台タブレットを持っていて、それを家庭に持ち帰るのもありだと思う。きちんとした使い方を身に付けるために、学校で一定のルールの下で使う、それを家に持ち帰って使うというものありだと思う。最初の挨拶の中で、光があれば影があると話したが、影というのは一方から光が当たるからできるのであって、360度全方向から光が当たれば影はできない。そういう光の当て方をすれば良いと思った。

教育長 テーマが大きかったので、またこれが議題になることがあると思う。山目小学校は市内の中で最もICTを活用した授業に取り組んでいる。今日見たものは一部分であり、11月には山目小学校で学校公開を行うので、その時にもまた授業の様子を見ることができたらいいと思う。

- 10 担当課
市長公室政策企画課